

アナログ再構成後の活用(20)
ーベートーベンを聴く(19)ー

1. 始めに

前報(19)に引き続き、ベートーベンのアナログ盤を試聴していきます。

2. アナログシステムについての改善の試聴方法

試聴は LINN LP-12 のシステムでアクセサリ関係も最新情報に基づいて実施し、要時 Garrad 401 のシステムも加えます。これまでの状況は、再生経路と変更点 4 に要約しています。なお、バイワイアリングのスピーカーケーブルにケーブルチューナーが装着されています。

再生経路は、前報(19)と同様、次のとおりです。

Garrad 401→AACU-1000→Stage1030→Brooklyn DAC+→AACU-1000→
P&G フェーダー→300B シングルアンプ

今回取り上げる盤は、次のアナログ盤です。

PHILIPS X-5632

ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品 61

ヘンリック・シェリング (ヴァイオリン)

ベルナルド・ハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウオーケストラ

3. アナログシステムについての改善結果の試聴結果

シェリングは、派手過ぎず、地味過ぎず、艶のある音色の中庸でゆったりしたテンポで音楽を構成していきます。これに呼応してハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウもオーソドックスな演奏です。

盤質も比較的良好で、これらのコンビネーションの演奏スタイルが相まって、これぞ正統派のベートーベンといった演奏となっています。

4. まとめ

アナログシステムの再構成の結果、シェリングとハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウのコンビの名演奏を享受できるようになりました。

以上